View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Gunma University Academic Information Repository

いのある看護へ結びつく事へと変化した事が明らかとなった. 病棟編成後において, 家族・看護師双方のグリーフケアとして有効であることが示唆された.

3-1-2. 群馬県内の医療用麻薬使用状況

蛭田英里子,[1] 浅野 竜也,[2] 齊藤 妙子[1]
三島八重子,[1] 飯塚 明彦[2]
（1 群馬県立がんセンター 薬剤部
2 群馬県健康福祉部薬務課）

【目 的】 日本のがん疼痛治療に使用される医療用麻薬はモルヒネ, オキシコドン, フェンタニルが主となっている. 近年, その剤型が充実し, 患者の状態に適した薬剤の選択が可能となり, 使用量も変化している. 医療用麻薬の使用量を疼痛緩和の充実に対する一つの指標として, 群馬県内における使用量・状況を調査したので報告する. **【方 法】** 群馬県知事に提出された 2009 年 10 月～2010 年 9 月分の麻薬年間受払届をもとに, 県薬務課にて集計処理を行ったデータについて, 病院 (診療所含む)・調剤薬局におけるモルヒネ・オキシコドン・フェンタニルの払出数を集計し, 多角的に分析した (動物病院・研究施設を除く). 各薬剤使用量は, 国際麻薬統制委員会の換算を用いてモルヒネ換算量で表した (モルヒネ 1 g＝フェンタニル 6 mg＝オキシコドン 0.67g). **【結 果】** 県内の年間医療用麻薬使用量は約 48.8mg/人で, 日本における研究用等を含む医療用麻薬全体の消費量約 40.5mg/人を上回っていた. 各薬剤の使用比率は全国平均とほぼ同様で, フェンタニル／オキシコドン／モルヒネ (約 82.2%／10.5%／7.4%) の順で多かった. 医療用麻薬の取扱の多かった地域は前橋／太田／伊勢崎／高崎 (約 23%／17%／12%／11%) であった. 県がん診療連携拠点病院／地域がん診療連携拠点病院／群馬県がん診療連携推進病院／一般病院／診療所／調剤薬局では, 全体の約 6 %／31%／10%／22%／1 %／30%の使用量であった. 剤型では, 病院が調剤薬局に比べオキシコドン経口剤 1.09 倍, モルヒネ経口剤 1.77 倍, フェンタニル貼付剤 2.45 倍の使用量があった. モルヒネ注射剤, フェンタニル注射剤で使用量の 95%以上を病院が占めたが, 約 3.6%のモルヒネ注射剤が調剤薬局で使用されていた. 病院, 調剤薬局ともにフェンタニル＞オキシコドン＞モルヒネの順に使用量が多かった. **【考 察】** 県内の医療用麻薬の約 30%は調剤薬局から払出されており, 外来診療や在宅医療を意識した疼痛緩和への更なる取り組みが必要である. 2006 年がん対策基本法が成立し, 緩和ケアの充実が重要課題の一つとして掲げられている. 地域格差の無い, 病院と外来, 在宅間のシームレスで積極的かつ副作用の少ない疼痛緩和のため, 診療連携拠点病院, 地域の病院, 緩和ケア病棟, 調剤薬局, 在宅緩和ケアとの連携が必要になっていくと考える.

3-1-3. 新規嘔吐抑制薬の使用状況と有効性の検討

神谷 輝彦, 田島 祐輔, 室田 和利
田部井精市 （館林厚生病院 薬剤部）

【目 的】 がん化学療法では, 有害事象の発現を抑えるために適切な支持療法を施すことが重要である. 2010 年には, 制吐薬適正使用ガイドラインが作成され, 悪心・嘔吐対策の標準化への取り組みが高まっている. 今回, 当院で施行されたがん化学療法において, 新規嘔吐抑制薬 (NK_1受容体拮抗薬: Apr, 第 2 世代 $5HT_3$受容体拮抗薬: Palo) の使用状況と有効性について検討した. **【方 法】** 1. 当院にて, 2010 年度に施行されたがん化学療法 1681 件を対象に, 新規嘔吐抑制薬の使用状況について, 2. 消化器症状を訴えてから Apr を投与された 18 例を対象に, 投与前後における消化器症状の変化について, それぞれ調査した. 本研究は院内倫理規定に従い実施した. **【結果】** 1. 新規嘔吐抑制薬の使用状況は, 1,681 件中 Apr 133 件 (7.9%), Palo 46 件 (2.7%) であった. Apr の投与が標準化されていたのは, 泌尿器癌の GC レジメンと PEB レジメンであった. 白金系や CPT-11 を含む他のレジメンでは, 症状に応じて投与されていた. 2. Apr 投与前後における消化器症状の変化について, 18 例中 15 例は, 症状が改善もしくは軽減した. 無効であった 3 例中 2 例は, $5HT_3$受容体拮抗薬を Palo へ変更したところ, 症状が改善もしくは軽減した. **【まとめ】** 新規嘔吐抑制薬の有効性が示唆された. 今後は, 悪心・嘔吐対策の標準化を検討しつつ, 個別化した柔軟な対応やセルフケア教育, 費用対効果等も考慮した質の高いがん化学療法を提供していきたい.

〈セッション 3-2〉

3-2-1. がん性疼痛, 痛み閾値を上げるための看護の試み ～レスキュー自己管理を行って～

眞中 怜子,[1] 奥澤 直美,[1,2] 小川美代子[1]
恩幣 和子[1]
（1 国立病院機構 西群馬病院 看護部
2 緩和ケアチーム）

【はじめに】 がん性疼痛は身体的な苦痛のみではなく, 社会的, 精神的, スピリチュアル的な苦痛をもたらす. がん患者にとって痛みの症状緩和は, ADL・QOL の向上に不可欠であるが医療用麻薬と聞くと怖い薬といった印象を持つ患者がいて使用を躊躇することがある. 今回, オキノームの内服に抵抗感, 不安の表出がある患者に対して痛み閾値を上げる関わりができたため報告する. **【患者紹介及び経過】** 60 歳代 女性 胸腺原発カルチノイ